

近世城館跡の陶磁ノート(1)

井上喜久男

1. 近世城館跡とは

すでに二階の展示をご覧になった方が多いと思いますが、会場には破片ばかり並んでおります。見る人にとっては単なる破片ではありますが、これは近世城館跡、つまり戦国の城・館の跡、それから町屋、京都・大阪・堺でいわゆる市民生活を営んだ人々の屋敷跡から出た焼物で、全て歴史の生証人であるわけです。全て使われた焼物であり、それぞれの時代のドラマを掘り潜ってきたものであります。

まず、題名のことではありますが、近世城館跡という言葉は非常に馴みの薄い言葉であるかと思えます。最近の教育委員会等で出されております城の調査報告は全て中世城館跡という名称でもって、中世という名称を冠して呼ばれているものがほとんどであります。なにゆえ近世城館跡という形で今回問題を設定したかといいますと、近世の捉え方の問題に係わってくるかと思えます。

一般に近世といいますと、安土桃山時代を含んで江戸時代一杯と、普通に考えているわけです。その近世の発端は、信長が上洛しまして天下統一をされた永禄10年代以降と考えているわけですが、それ以外にもう1つの意見としましては、太閤検地などで国の統一をさらに進めました豊臣秀吉の時代以降ではないかという考え方もございます。また関ヶ原の戦い以後、徳川家康が覇権を握るわけですが、それ以後を近世と呼ぼうという方もございます。その他、家康が征夷大将軍に任ぜられまして慶長8年に江戸幕府を開くわけですが、それ以降を近世と呼ぼうという方もございます。また武家社会をきちんと整えました元和年間の元和偃武と申しますか、それ以降を近世というふう考える方もおられます。

しかし、また一方の考え方としまして、大名領国制が戦国期、室町後期からすでにそういう社会体制が形成されてきているという事実立ちまして、今回扱っております室町後期・応仁の乱以降の時代ですが、それ以降を近世と考えてもいいのではないかという見方に立つ歴史の方もあられるわけでありまして。

今回、私どもの陶磁史の面から、この戦国時代と呼ばれております15世紀終り以降の遺跡に伴う出土品を調べてまいりますと、その全貌が現在二階に並んでいるものであります。瀬戸・美濃窯の施釉陶製品、それはこのレジュメの1番最初にあります一覧表(付表)の通りであります。瀬戸・美濃窯製品と常滑・越前・信楽・丹波・備前、それから西の方で唐津の焼物、これも施釉陶であります。そういうものが入っております。

そういった焼物が出てくるわけですが、特に施釉陶の瀬戸・美濃製品というのは鎌倉・室町時代の窰窯による生産体制から大窰と呼ばれる半地上式の窰で生産された製品に変わります。その製品が会場に並んでいる製品そのものと考えていいわけです。

それまで、山の斜面に掘り抜き、ないしは天井の一部を架構した窰窯と呼んでいる生産体制から、この地方で大窰と呼ぶ、部屋の中に支柱を持った半地上式の窰による生産体制に変わります。これがほぼ15世紀末ではないかというふう考えているわけですが、この大窰製品が戦国期の遺跡から出てくる焼物なのであります。

そうしますと、室町後期(15世紀末)から出てまいりますこの大窰製品と申しますのは、まだ

茶陶が焼かれていない時代でありますので、鉄釉・灰釉の世界のものであります。皆さんに馴染み深い、いわゆる桃山茶陶と呼ばれている志野・黄瀬戸は天正10年代以降にならないと出てきません。つまり、16世紀後半の1580年代以降にならないと出てこないわけで、その前段階に鉄釉・灰釉を長く焼いた時代というのが存在しているわけです。そういう生産状況が、大窯生産の展開過程と考えています。

こういうふうに考えてまいりますと、先程政治史の方で近世の設定をいたしました、信長が上洛した以降を近世とするには、ちょっとそこで大窯生産期を切るわけにはいかないということがあります。そこで、大窯生産体制そのものが近世窯業の初期の形態ではないかという考え方に立ち、陶磁史では大窯生産の開始をもって近世の幕開けと考えてはどうかと考え、今まで中世城館跡という形で戦国期の城館跡を取り扱ってきた時代のもを近世城館跡という形で捉えたわけであります。

また大窯生産の編年五時期の実年代につきましては後ほど触れたいと思います。

2. 近世城館跡出土の陶磁資料

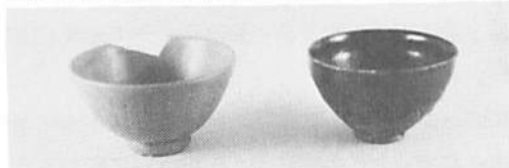
それでは近世城館跡—この戦国期から江戸初期にかかる時代のもが会場に並べてあるわけですが、一体どういう焼物が出土するのであろうかというのをまずスライド(=図版)で見てください、その後、少しばかりの見解を述べてみたいと思います。

スライドは地域順ということではなく、出土器種により遺跡を選定しております。展示の説明が不十分で申し訳ありませんが、展示図録に一応展示方法と同じような形で説明が加えてありますので、詳しくは図録を見ていただきたいと考えております。

室町後期は非常に栄枯盛衰の激しい時代でありまして、文献的に確かめられる遺跡は非常に多くありますが、滅亡しましてもまたすぐ別の武士団が入って復興するという形を経ておりますので、中々文献上の年代と焼物とが合わないということがあります。

今回の資料はそれぞれの学芸員が分担して選定したこともあり、量的にその出土量をはかれないというのが欠点といえますか、制約があります。ですから各遺跡の展示品を見ていただいて、ここが中国陶磁が少ないとか、他のやきもの、他の産地のものが少ないというのは借りる時に全量の中から割合に合せて借りてきているわけではありませんから、その点は判断の材料にはなりませんのでご了承願います。

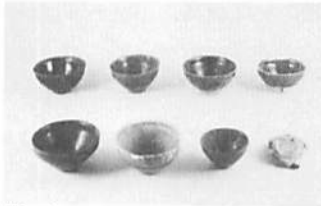
実はこの近世城館跡から出てくる焼物と申しますのは、同じ器形にしましても、たくさん種類のもが出てまいります。例えば、まず大きく目立ちますのは天目茶碗と呼ばれる黒釉をかけた口縁がちょっと変化をします碗であります。これは大・中・小、小は小杯という形で呼ばれるむきもありますけれど、一応、大・中・小の区別があります。



1*

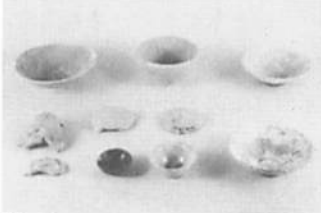
(1*) これは埼玉県の大光寺裏遺跡という、大光寺の寺域にかかるところから出てきた天目茶碗と青磁蓮弁文の中国陶磁の茶碗であります。こういう天目茶碗が一番大窯製品として古い天目茶碗だろうと考えられるものであります。

*付表展示城館跡番号に対応。以下同じ。



56-1

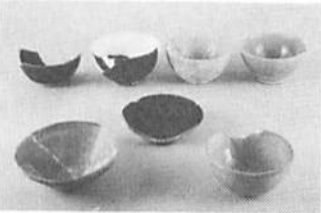
(56-1) これは一乗谷朝倉氏遺跡から出てきてる天目茶碗の類形ですが、こういう黒釉の中にちょっと黄味をもった葉のものがああります。こういう黄味を持ったものがただ窯の焼成による変化だけではなく、葉として調合した違った葉だろうと思ひます。これは天文年間以降大きな茶会記がたくさん出てまいりますが、その茶会記の中で黄天目というのがあります。おそらくこういう黄色をさしたものを言っているのではないかと推察できる資料であります。



56-2

(56-2) それから灰釉碗類にまいりますと、平形の平茶碗があります。平茶碗には無文のもののほか、側面に大きな押印の蓮弁文を持ったものがあります。平形の平茶碗でもちょっと黄味をもって禾目状に白濁する傾向のものがあります。これも天目茶碗の時、申しましたような黄天目の1つの種類ではないかというふうを考えております。今回図録で

いわゆる黄瀬戸釉平茶碗という名称をつけておきましたが、素地の上に鉄化粧掛けをして、その上に灰釉を掛けますと灰が下の鉄分と調合しまして、ちょっと黒味を帯びて黄色く発色するというのを利用しているようです。それから丸茶碗と呼んでいるものがありますが、これなどは口縁・外側面に蓮弁文様を押印しまして、先ほど中国青磁碗に出てまいりましたものは線描きでありましたが、それを写したと思われるような形で押印しました蓮弁文写しのものが生産されていま



37-8

す。それから櫛描きの櫛目文を施しました丸碗があります。もちろん無文のものもあります。それから小さな杯、ちょっと天目形に近いものですが、鉄釉の小杯が出てまいります。

(37-8) これは愛知県の清洲城下町遺跡から出てきてるものですが、ここからも蓮弁の印刻をもった丸碗が出てまいります。平茶碗にしても、これは先に黄瀬戸釉平茶碗じゃないかと申しました形のものですが、これは普通の天目茶碗と同じような黒褐色の釉が掛かっているものであります。ですから同じ器形におきましても葉によって種類をかえているということでありす。



31-2

これは瀬戸・美濃窯で生産されたものと思ひれますが、無釉の平茶碗が出ております。

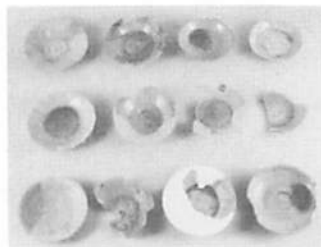
(31-2) これは豊明市の沓掛城跡から出たものでありますが、平茶碗の中にはちょっと黒っぽいものと、長石の白釉を四方に散らして文様化したものも作られております。非常に窯跡では見ることのない珍しい器種と思ひます。あとは一般に言う天目茶碗であります。



8-7

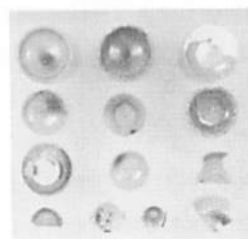
(8-7) それから灰釉皿に移りたいと思ひますが、大窯製品として灰釉皿の一番初期と思ひられる大形の皿としまして、この手の皿があります。これは内面に一応菊印花文を持っておりすが、口縁がちょっと外へ曲がります。

それからこれは後から話題に出したいと思いますが、浜名湖の北の細江町に初山焼と呼ばれている大窯があります。小田原城跡本町小学校遺跡から出ましたこの2点は初山窯の製品ではないかと思われるものです。



56-4

(56-4) それから一乗谷朝倉氏遺跡から出てきました灰釉皿の各種であります。これは普通の丸皿、これは腰が折れずに高台脇から口縁に向って外反する稜花皿と呼んでおります皿であります。その稜花皿には櫛目文を描いたものと描かないものがあります。それから開いた口縁の部分を波状にゆがめているものがあります。

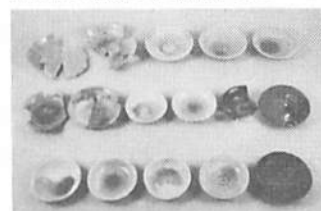


56-5

それから開いた口縁が外反しますが、底部の高台のところに葉を掛けないタイプの皿があり、大窯製品として一番初めに出てくる器種と認定できるものであります。それから内面底部を無釉状態に葉を掻き落して焼いた内ハゲ皿と呼んでいる皿があります。

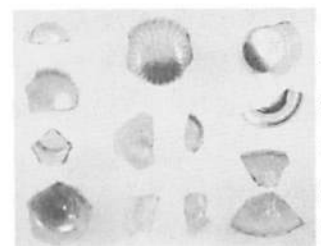
(56-5) 各種皿のうち、これも朝倉氏遺跡から出たものですが、普通の丸皿にいろんな印花が押し当てられています。それから朝倉氏遺跡しか出てきていないわけですが、外側面にへら刻線を入れている。掘り取ってはいないが外側面に文様を入れている皿としましては今回展示品の皿の中で唯一であります。

それからおどけた形の魚の形に変えております小さな皿が2点ほど出ております。これは普通の丸皿に粘土塊をつままして魚形にしているということでありまして。それから普通の丸皿の内側面を丸ノミで掘りましたいわゆる菊皿と呼ばれる器種があります。



32-2

(32-2) これは豊明市の沓掛城跡から出ている灰釉皿であります。丸皿の中に口縁を波状にするだけでなく、隆帯として筋を作りまして菊花の形にしているものもあります。また、そうせず口縁だけにへら目を入れて、ひだ皿と呼んでおります皿があります。それから外側面の腰部にへら削りの稜線を作り出して外反する鉄釉稜皿と呼んでいる皿が出てまいります。

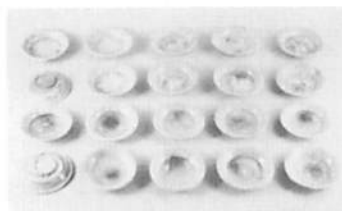


44-2

(44-2) これは瑞浪市鶴ヶ城跡から出ている灰釉皿類であります。やはり沓掛城跡と同じような菊花皿が出ております。それから口縁部をちょっと外側に縁帯風に折り曲げまして、折縁皿と呼んでおりますものが出ております。見にくいかと思いますが、その折縁皿の内面に丸ノミで削ぎとりまして、菊皿風にしてあるものが同じ器形の中にあります。これは鉄釉を塗った大きな鉢なんです、鉄釉を塗ったあと、文様の部分だけ鉄釉を掻き取り、掻き取ったところへ

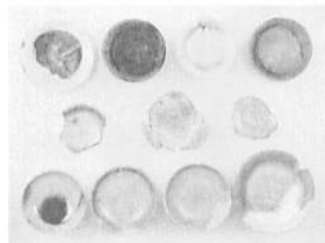
長石釉を流し込みまして文様にしています。これを一般に今まで変わり黄瀬戸と呼んでいるものであります。これは釉薬を剥ぎ取っていませんが、白くなっているところは本来、葉を剥ぎ取る形の内ハゲ皿と呼んでいるものであります。ここにも朝倉氏遺跡に出ておりました魚形の皿が出ております。

(10-4) これは灰釉皿の器種の一番古いというふうに申し上げた皿であります。山梨県の新巻本村遺跡という、会場の中央の衝立の奥のところに3点ほど甕が並んでおりますが、その真ん中



10-4

の常滑の大甕の中から出たものでありまして、内面の全面施釉した底部のところに重ね焼きの目跡3点を持っており、高台底部のところが無釉のものです。こういう皿が大窯生産が始まった初期に出てくる1つの灰釉皿であるわけです。いままで紹介しましたほとんどは全面施釉皿であります。こういう高台の部分が無釉のまま残す皿というのが、大窯の一番古い時期の器種であるということでもあります。



5-1

(5-1) これは東京都葛飾区の葛西城跡の出土品であります。このような全面施釉の皿というのは大窯製品の特有の皿であります。その中に口縁だけに薬を掛けた皿が混っております。葛西城というのは非常に長い年月使われまして、江戸時代も將軍さんの鷹狩りの場になって休憩所等ができたことありまして、江戸時代一杯使われているということです。出土品を遺構的に年代を

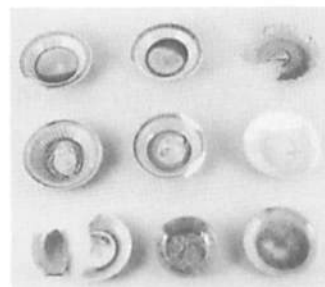
区切った形でとらえることができないですが、この中で口縁だけに施釉してある皿があります。こういう皿は窯窯の最末期の資料として考えることができます。もちろん糸切り底の皿であります。この窯窯最末期の器種というのがこの城跡の出土品の中にはかなり含まれております。それからおろし目を入れましたおろし皿風のものがありますが、これはどうも窯道具ではないか。大窯の生産体制は匣鉢入れ焼成ですが、その中に窯道具として狭み皿というのがあります。その狭み皿としても使い、さらに製品化しているのではないかと思われるのが、こういうものであります。これはその可能性が非常に高い。狭み皿の本来は窯道具の器種であります。それに灰釉を掛けて、それまでも製品化して売り出しているということが考えられるものであります。



12-1

(12-1) これは山梨県の金生B区遺跡から出ている器種であります。小鉢状の皿があります。これにはボロ降りと言いましてゴミが降って付着しており、匣鉢に入れずに裸で焼いたものだろうと思います。窯窯最末期の器種であります。それから今まで見て

きました普通の丸皿、小杯・蟹形水滴・兎形水滴が出ております。こちらは普通志野織部の皿と呼んでおります連房式登窯になった時代に出てくる鉄絵の皿であります。



37-5

(37-5) それからこれは清州城下町遺跡のものだと思いますが、折縁皿と呼ばれている皿があります。こちらは同じ器形であります。内側面に丸ノミの削ぎを入れた菊皿というものです。それからこれはご存知の内ハゲ皿と呼んでいるものです。あとは丸形の皿、ひだ皿です。丸形の皿は同じ器形としましても、焼く時に狭みを使わない場合、詳しく説明しますと長くなりますが、重ね焼きをするために本来なら全面施釉すべき器形の皿でも、内ハゲ皿にしまして重ね焼きをするという皿も出てまいります。ですから

そういうものを合せるとかなりの器種にのぼってくるということが言えます。

(56-6) これは朝倉氏遺跡から出てきた鉄釉の皿で、全面施釉された丸形の皿であります。これは先程申しました稜皿と呼んでいる腰の部分で稜線をもつ皿であります。それからこれは小形



56-6

のおろし皿であります。おろし皿は窖窯最末期の器種のものとしてとらえることができますが、近世城館跡出土品の中にもわずかに含まれる遺跡が多くなりました。それからもう1つの釉薬として銅緑釉の皿があります。これは普通の丸形の皿であります。これは平茶碗形のものであります。こちらは徳利・瓶で、肩に突帯を持つものです。この緑釉と申しますと、もうすぐに織部というふうなかたちでとらえがちですが、織部と申しますのは慶長年間以降の焼物の一群を指して申している言葉であります。しかも

16世紀前半代に出てくるものを織部というかたちで名称を付けにくい。総織部の皿というわけにもいきませんし、また緑釉と申しますと平安時代の緑釉を連想させますので、一応分ける意味を持ちまして銅緑釉と銅という言葉をつけまして、文字の上でも区別されているわけです。



7-1

(7-1) これは東京都八王子市八王子城跡から出ました鉄釉・銅緑釉の皿類であります。これは大形の口縁がちよっと外反するタイプのものであります。これは外反しませんか口縁部にへら目が何か所か入っている輪花風の皿です。これは普通に稜皿と呼んでおります皿でありますか、こちらは口縁を波状に変化させております。ですから同じ本体の器形を持ちながら、細部で違った変化を持たせて器種を変えているというのが出てまいります。これは朝倉氏遺跡の出土品の時説明しました銅緑釉皿の大形品であります。これは銅緑釉の丸碗と呼ばれているものです。これは輪花風になっておりまして、形も木瓜形といいますが、違った形の皿になりそうであります。あと2点は志野の製品であります。どうも志野と申しましても釉調から見ますと、連房式登窯で焼かれたと思われるもので、図録の名称は志野織部という名称を付けさせてもらいまして慶長以降のもの

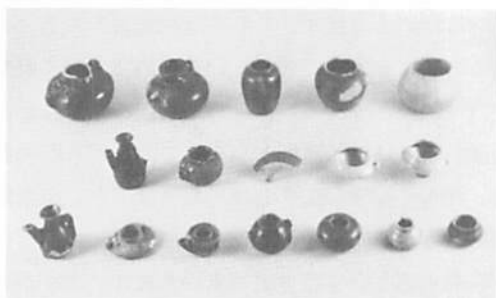
というふうにご考えております。



19-1

(19-1) それから銅緑釉の製品の中には天目形、天目茶碗と呼んでもいい形のもので出ております。これは長野県飯田市松尾南の原遺跡から出ました天目形の銅緑釉茶碗であります。

(56-3) それからいろんな小壺類、水注類がたくさんこの時代には出てまいります。肩に耳を持った水注、さらにそれを小形化した硯の



56-3

ための水滴だろうと思われるもの、また形は変わりますが、細長い形の手付で、長い注口が付いている水注もあります。それからおそらく茶入に使ったのだろうと思われる小壺類があり、長胴形のものから丸壺形のものまであります。これは胴紐が付きまして大海茶入と呼ぶにふさわしい形をそなえた製品であります。それからこの2点はちょっと円錐の独楽形みたいな形を

しておりまして、1カ所に方形の突起があり、それに穴が開いております。おそらくこれは鳥の餌鉢ではないかと考えております。こんなようなものまで出てまいります。



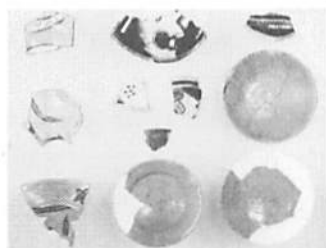
56-8

(56-8) それからいろいろな水を入れる瓶類があり、瀬戸・美濃窯の大形瓶や小形瓶と、備前窯の製品があります。それから珍しく瀬戸・美濃窯産の片口鉢が出ております。これは朝倉氏遺跡から出ましたものであります。



62-8

(62-8) これは滋賀県の観音寺城跡から出ましたものです。瀬戸・美濃窯産の甕であります。同窯では大形の貯蔵用器というのはなかなか作らないのですが、甕だけは作っておりまして、このような全面に鉄釉を塗ったものが生産されております。それから徳利・瓶も出ています。また観音寺城跡の出土品しか見られておりませんが、鉄釉櫛目文双耳壺があります。これは肩部に櫛目波状文が入っておりまして、2カ所に耳が付いているもので、窖窯時代に通有にみられる四耳壺の形体をひいてきているわけですが、大窯の一番古いところで生産されている可能性があるという製品であります。



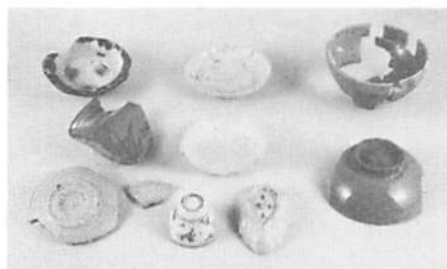
77-8

(77-8) それから時代が少し下りまして江戸時代の初期ぐらいの焼物に行きたいと思えます。やはり織部焼といわれております一群があるわけです。これは赤土を化粧しましたいわゆる赤織部、それから鉄絵に長石釉を掛けました志野織部と、弥七田窯に代表されるような感じの志野織部の製品が出ています。これは普通の緑釉を掛け分けしました青織部の角向付であります。この3点は絵のない唐津の製品であります。



84-3

(84-3) これは島根県の富田川(今は飯梨川と言っております)の河床から出ましたもので、かつて城主でありました尼子氏の城下町があったところであります。現在河川敷になっているわけです。そこから瀬戸・美濃窯製品が多く出ております。それらは志野菊花皿、茶碗、青織部、志野三足向付であります。これは胴紐が付いたり、付かなかったりしますが、平向付と呼ばれている

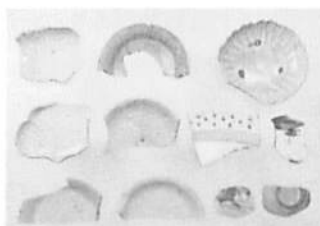


84-4

黄瀬戸であります。これは半分頭の方としっぽが欠けておりますが、おそらくふくら雀の形をしました水滴だろうと考えます。

(84-4) これも同じく富田川河床から出ましたものであります。唐津の製品であります。これは口縁に鉄釉がある朝鮮唐津と呼ばれているもの。これは普通の絵唐津。これは側面のところに彫文様を施しました彫唐津と呼ばれている抹茶茶碗であります。こちらに

ありますのは中国陶磁の全部であります。変形した皿の底部に天文年造という日本の「天文」の元号が付いております。こういう資料が朝倉氏遺跡、それから和歌山県根来寺坊院跡からも出ております。これも面白い事実だろうと思えます。



28-2

(28-2) それから時代が新しくなりますが、浜名湖の南の海洋に面したところの新居町の御殿跡遺跡と呼ばれております、将軍の宿泊所になったといわれております遺跡から出てくる製品で、御深井釉の葉形皿、木瓜形皿があります。御深井釉製品としては非常に古い形態をもっておりまして、土岐市泉町久尻元屋敷周辺からたくさん出てくる御深井釉の一番古い器種に相当するもので

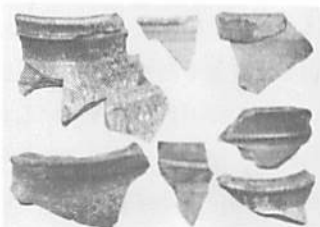
す。それから御深井釉がちょっと透明化しております皿、それから菊皿があります。これらは江戸時代に入りまして17世紀後半に移る時期のものであろうと思っておりますが、この遺跡が元和5年から元禄年間まで将軍秀忠から家光まで宿泊した記録があるとされ、文献的にまちがいないとすればだいたい元和年間から元禄位いの中に含まれる資料がこういうものであろうと思われまゝです。この時期の遺跡には伊万里窯の染付磁器があります。それから1点であります、裏の底部のところに「清水」と印刻されているものがあります。清水は京都の清水焼の印だろうと普通に思われていたわけですが、ところが九州の伊万里市の鍋島藩窯の地域の窯からこの手のものが大量に出てまいりまして、京都産かどうかあやふやになっております。

現在京焼風陶器といっております焼物です。



22-4

(22-4) ただ今見てきましたのが瀬戸・美濃窯の主な器種（一部唐津窯を含みますが）であります。それに総じて伴うものとして常滑窯製品があります。常滑の甕は口縁の形態がかなり変わっておりますものが伴ってまいります。これは駿府城跡内遺跡といひまして徳川家康が作りました駿府城のものではなくて、その前代の今川氏時代の遺跡のものであろうと思われております。



28-6

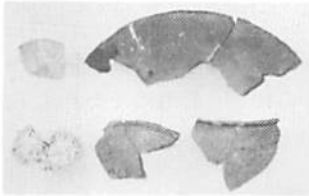
(28-6) これは新居町の御殿跡遺跡から出ました常滑窯の甕であります、駿府城跡内遺跡出土のものとは比べまして口縁の形態が全然違うなというふうにお気づきと思われまゝです。縁帯が全然なくなるもの、形式的にしか付いていないもの、そして口縁の上が平たい面として残り、断面を切りますと三叉状の断面になるようなものがあります。このように常滑窯の甕の口縁が変化してくるは、元禄年間ぐらいいまでは存在するんだらうと推察できる資料であります。



48-2

(48-2) それから常滑窯の製品の中には甕と同時に播鉢、捏鉢とも呼んでいる鉢があります。常滑窯製品は通例内面におろし目を付けませんので、捏鉢というように、また片口を設けておりますので片口鉢というふうに言っているわけでありまゝです。出土品は非常に内側面と底部のところ、摩耗痕が著しいものが多いので、捏るだけではなくて、播る作業も行

われたことは事実のようであります。それからちょっと小さめの広口甕が出ております。これは三重県関町の関氏正法寺山荘跡から出てきましたものです。伊賀と伊勢の境に近いところでありますので、信楽窯製品が含まれているというところでもあります。信楽窯の播鉢はおろし目をもつ



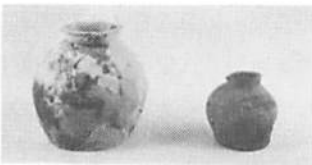
46-2

たもので、常滑窯とは違った形態をしております。
 (46-2) これは三重県員弁郡東員町の山田城跡から出たものであります。城跡は山頂のところに三つの郭が作られておりまして、その土塁の真下から出ておりますといいますが、土塁が風雨にさらされて流土で土塁の裾の部分が非常に埋ってしまっているわけが多いわけですが、その埋った最下層からいわゆる山茶碗ではないかと思われるものが出ております。非常に浅くて、糸切りのままの底部で、真直に開いた形の山茶碗です。山茶碗としてはこの地方、瀬戸窯・美濃窯・猿投窯・常滑窯で焼いているわけですが、最終末形態だと思われるものであります。これがこの城跡の創成期、作り始めた時期の遺物としてまず時代的には間違いないものだろうと思います。後からの混入というのは全然考えられない調査所見がありますので、大窯製品が登場してくる時期までこういう山茶碗の最終末の製品が伴う可能性があった。言い換えれば、山茶碗生産が15世紀末位まで継続している可能性が非常に大であるというふうに言える1つの傍証例として今後注目すべきだろうと思います。



56-16

(56-16) それから北陸にまいますと越前焼がありましてその製品は北陸地帯を中心としまして南は滋賀県まで、かなり出土しております。これは朝倉氏遺跡から出てきました越前窯の大甕・中甕・小甕という形のものであります。それから越前窯の壺、瀬戸・美濃窯の四耳壺、信楽窯の壺であります。また越前の大きな捏鉢といいますが、大鉢です。こういう手のものがこの時代の遺跡に含まれます。



56-18

(56-18) さらに小壺類ですが、これには鉄粉が入っておりまして、どうもお歯黒壺ではないかと考えられるものであります。



55-2

(55-2) これは石川県の鳥越城跡、白山一向一揆の拠点となった城跡のものであります。越前窯の播鉢はおろし目が密に入っております。また瓶の破片が出ておりますが、最初に展示図録には越前窯製品と書いたのですが、よくよく検討してみますと、どうも備前窯の徳利の可能性が非常に高いというのが現在の印象であります。

(56-14) それから朝倉氏遺跡から出てきましたものですが、越前窯の薬研、備前窯の胴紐の付いた広口の小甕と筒形の表面を波状にした水指と思われるもの、瀬戸・美濃窯の播鉢であります。

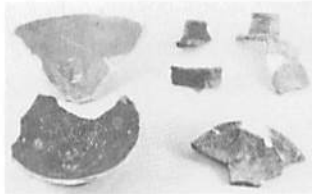


56-14



62-7

(62-7) これは滋賀県の観音寺城跡から出ましたものであります。信楽窯の甕、備前窯の徳利類、瀬戸・美濃窯の徳利と播鉢です。こういうふうには滋賀県では信楽窯・備前窯・瀬戸・美濃窯の各製品が1つの遺跡の中で共伴するとい



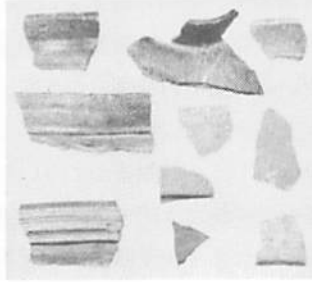
21-6

う事例であります。

(21-6) 備前窯製品の分布範囲というのは非常に広く、これは静岡県駿東郡長泉町・長久保城跡から出たものでありますが、この飯胴甕風の、長胴形の壺なんです、どうも備前窯の製品ではないかと思われるものです。



73-14



7-12

(73-14) それからご存知の三石入銘の備前の大甕であります。こういった大甕が16世紀後半代にたくさん作られてきて、各地で使われていたようで、これは和歌山県根来寺坊院跡から出たものであります。

(7-12) これは備前焼・信楽焼が東日本において出土した1例であります、八王子市八王子城跡の出土品であります。この大きな突帯からみまして、三石入りの大甕

になる備前窯の甕であります。この2点は常滑窯の甕と壺の破片であります。またこちらの壺の破片と思われるものは、どうも信楽窯の製品ではないか、この2点は備前窯の描鉢ではないかと



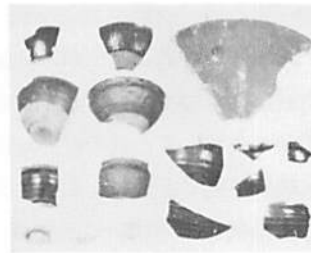
64-6

思われるものであります。

(64-6) それから信楽焼の分布範囲として滋賀県はほぼ全域的に出土するわけですが、これは大津市坂本城跡から出た信楽製品の描鉢と壺であります。



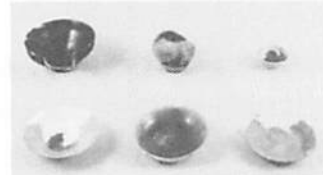
22-2



22-1

内遺跡から三足を持った香炉にしてはちょっと背が高いもので、どうも大窯製品と思われるものがあります。

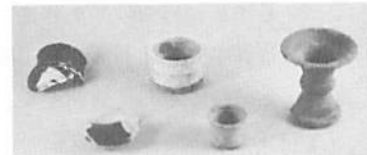
(22-1) それから小杯であります、側面に線描きの沈線が入っております。こういった製



55-1

品は器種的にもこれ以外に出土例がないもので、窯跡でも確認されていないものであります。(注:後に小金山窯跡から同例を確認)

(55-1) これは先ほど稜花皿という名称を付けておきましたが、高台から直線に開く皿であります。それから銅緑釉の丸形の皿であります、これは石川県の鳥越城跡から出た資料であります。それから灰釉小杯がありますが、中にベンガラ風のものが残っておりまして、紅皿のかわりにしているような形跡も考えられるわけです。



56-7

(56-7) 近世城館跡の中で窖窯製品の最末期のものが出てくると申しましたが、これは朝倉氏遺跡から出土した香炉であります。そのほか窖窯の最末



43-2

期の器種の出土例は何例も指摘できます。

(43-2) 個別器種についてですが、瀬戸黒茶碗として岐阜県可児郡兼山町の金山城跡出土資料があります。普通の瀬戸黒茶碗は土見せと申しまして高台の部分が露胎のものが普通でありまして、また一文字ないし、切っ立ちと申しますように筒形の高台の低いものが普通であります。この資料は腰の



43-1

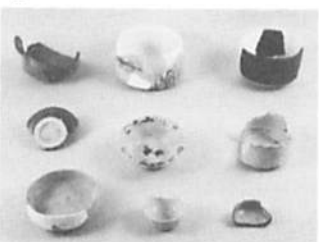
部分が丸くなりまして、高台まで全面施釉をしております。その形態は楽窯の黒楽茶碗と類似したものと いえます。このような黒茶碗が、瀬戸美濃窯で生産されているという事実は非常に興味深いものと言えます。

(43-1) これも金山城跡のもので、ちょっと志野風ではありますが、青味のある白濁したいわゆる灰志野釉製品があります。志野釉の登場してくる前段階の釉薬ではないかと考えているものであります。



15-1

(15-1) これは長野県松本城二の丸御殿跡から出た資料でありまして、灰志野釉の平形の向付であります。これは鉄絵文様を持っておりまして、黄瀬戸の器形を使いまして、灰志野釉が掛けられております。先に志野の前段階というふうに申しましたが、灰



66-3-1

志野製品は黄瀬戸の器体の上に作られているというのが1つの特徴だろうと思います。

(66-3-1) これは京都の中京郵便局構内から出ましたものです。志野茶碗・瀬戸黒茶碗があります。瀬戸黒茶碗は腰が丸く、高台とともに篋削り整形されております。それから唐津窯の杓形茶碗、黄瀬戸製品、連房式登窯の焼成と思われる志野織部の鉢があります。



66-1-6

(66-1-6) 江戸時代の製品になりますと、連房式登窯による焼成になりますが、これは織部の南蛮人燭台の首であります。それから大形の天目茶碗。白天目茶碗には段が付いております。また元屋敷窯などで通例出てくる志野織部の筒向付と呼んでいるものがあります。

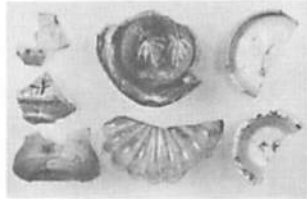


66-1-5

(66-1-5) これは普通の青織部の角向付です。この2点は楽焼でありまして、黒楽と赤楽です。黒楽の銘は楽家の印譜をみますと9代了入の隠居する前に使っていた印のようです。そうしますと18世紀後半から19世紀初頭にかけての時期に作られた楽茶碗ということになります。また赤楽茶碗の方は左入のものではないかということです。そのほかの2点は南蛮寺跡から出ました志野角向付であります。



66-1-11



66-2-1

(66-1-11) これは絵唐津と志野。唐津製品と志野製品が共伴するというのは遺跡の中ではほぼ確定的に言える現象と思います。

(66-2-1) これは京都の竹三条殿跡から出ているものですが、志

野茶碗・黄瀬戸向付・鼠志野、黄瀬戸とも呼ばれますが菊花形の大鉢が出ています。



66-2-3

(66-2-3) これも竹三条殿跡から出ましたもので、瀬戸黒茶碗と、長次郎時代の作品としていいだろうという黒楽茶碗です。それから京都で出ましたが「大福」という押印があります京焼風陶器というものです。



67-1

(67-1) これは京都伏見城跡から出ました型打ちの黄瀬戸角向付で、非常に珍しいものです。志野では通例でてくる器形ですが、黄瀬戸の型打ちのものというのは他に類例を知りません。



67-3

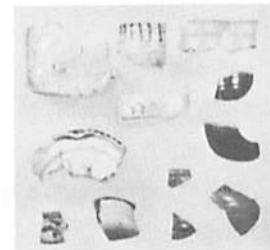
(67-3) それからこの2点が丹波製品です。こちらの3点は播鉢状のものもありますが備前です。これは黄瀬戸の銅羅鉢であります。



71-8

(71-8) これは大坂城三の丸跡から出た資料であります、この2点が赤楽の蓋と茶碗片であります。これは黒楽茶碗であり、長次郎時代のもと考えて指しつかえないものと思います。
(37-8) それからこれは清洲城下町遺跡のもので、唐津焼の杵形茶碗、志野の杵形に近い変形させた茶碗、総織部風の丸碗、灰志野釉の胴紐の向付など多種多彩なものが出ております。

(34-1) 名古屋市内の地下にもいろいろな名古屋城下町の遺跡がありまして、これは堅三蔵通り遺跡と呼んでおります出土品であります。織部製品など、名古屋市内の城下町に伴う資料がたくさん出てくるのが判ってきております。



37-8



34-1

(60-1) これは彦根城家老職の屋敷跡



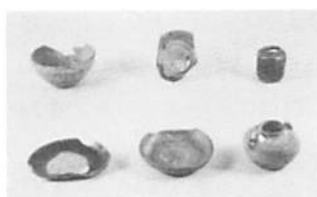
60-1

から出ているもので、青織部・志野織部・赤織部の角向付と志野織部の皿であります。



24-1

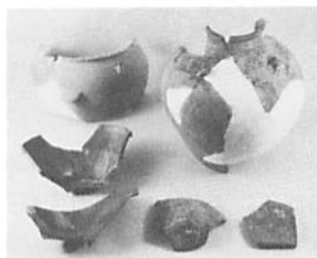
(24-1) これは志戸呂焼だろうと思われるもので、島田市の居倉遺跡という、武田氏の家臣であった安間氏が島田に出てきて、武田滅亡後におちつくわけですが、その屋敷跡と思われるところから出ましたものです。ちょっと瀬戸・美濃物とは違う製品でありまして、これがどうも地元の島田や金谷にあります志戸呂焼の製品ではないかと推定しているものであります。



86-1

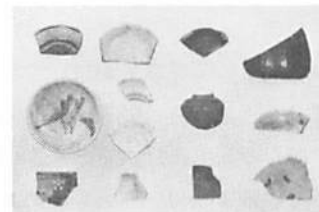
(86-1) これは今までちょっと出てきましたが、浜名湖の北に初山窯(焼)があり、大窯がありまして非常に鉄分の強い土で作りました製品を焼いております。

(86-2) それから大きな壺・壺類・播鉢というものを焼いております。器種的には瀬戸・美濃窯の大窯製品と同じ器種をそろえております。



86-2

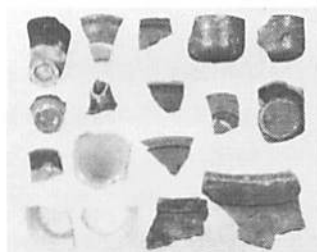
(28-1) これは新居町の御殿跡遺跡から出てきたものであります。初山窯とは浜名湖対岸の遺跡であります、この2点がどう



28-1

も初山窯の製品だろうと思われるわけです。

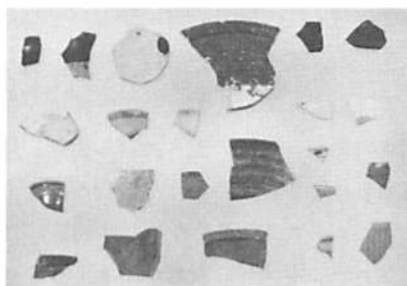
(17-2) これは長野県飯田市の恒川遺跡から出てきたものであります。飯田市には尾林焼と言われている慶長年間の銘がある狛犬が



17-2

伝世しておりまして、ちょっと著名な窯なんです、どうもこの製品が尾林焼の製品ではないかと思われるものです。

(20-1) これは年代のことで申しました大窯の発生年代をいつにするかという問題の遺跡の1つだろうと思えます静岡県蕪山町の堀越御所跡から出ましたものであります。この遺跡は將軍足利義政が弟政知を鎌倉へ下行させますが、鎌倉へ入れずに蕪山へ居をかまえ御所を営み、その死後に乱が起り、北条早雲に焼落

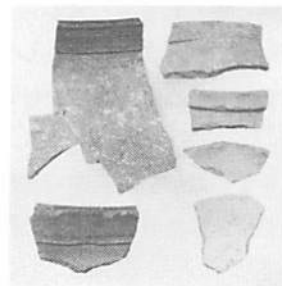


20-1

されて滅亡するという歴史があります。1491年のことであります。その下行した年代が確か1457年だったと思えますのでわずか30数年間の遺跡であります。その遺跡から出土しました遺物の中で、これらの天目茶碗・灰釉皿・鉄釉壺・鉄釉皿は全て窖窯最末期の資料であります。この製品は大窯の最初に出てくる灰釉の菊印花文皿、この播鉢はどうも大窯製品であります。この遺跡の廃絶年代が確かなものであるとすれば、窖窯製品の最末期の

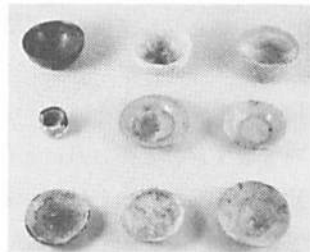
製品の中に大窯最初期の製品が伴っている1つの事例を示すこととなります。文献的に良く、遺構的にも確かなものというふうに認定できれば、大窯I期の最初期の製品が1490年代にはこの蕪山町の堀越御所の中に登場したと、また大窯の発生はそれより前に可能性があり得るというこ

とであります。通例、応仁・文明の乱以降に大窯生産に転換しただろうと考えられた1つの傍証といえますか、それを示す事例ではないかというふうに考えられます。



20-2

(20-2) これはそこから出てくる常滑の製品であります。この常滑の製品は口縁部の縁帯の折り返しがきちんと残っておりまして、この時代の15世紀末のものと認定してほぼさしつかえないものです。これは播鉢であります。



23-1

(23-1) これは焼津市の小川城跡のすぐ隣りに道場田遺跡と呼んでおります遺跡のもので、遺跡名は変えておりますが、小川城跡と非常に関係するだろうと思います。そしてこの2点が享禄4年(1531)の木札といっしょに土壌から出てきた資料であります。この資料は

口縁に灰釉が掛けてあり、非常に丸形の底部になっておりまして、糸切底であります。非常に摩耗痕が著しく、表面がつるつるしております。これは他のかなりの出土品と比較してみますと、この摩耗のしかたは異状なほどであります。したがって、非常に伝世期間が長い、使用期間が長いという可能性が考えられるという資料でありまして、スガが付いておりますので灯明皿に使われたと思われま



71-1

が、器形的には大窯の最初の時期になって窯窯器種が残存している1つの形態のものであって、大窯で作られたものだろうと思います。1つの年代を考える上での資料に成り得ると思います。

(71-1) これは大坂城三の丸跡から出てきた資料であります。現在の大坂城は徳川時代の城であります。地表から数メートル下に秀吉が作りまして秀吉時代の大坂城が埋もれて

いるわけです。さらにその下には石山合戦でお馴染の石山本願寺時代の遺物がやはり封印されたようになっております。この遺物はその最下層のところから出てきたもので、石山本願寺時代の遺物だろうというふうに考古学的に認定できる資料であります。ですから天正8年までの石山本願寺時代の遺物と考えられます。つい最近、今年になりましたが、大阪市の方で調査しましたら永禄5年銘の瓦を伴う遺物層が出てまいりまして、やはり石山本願寺時代の遺物・遺構が残っていると確認されておりますので、さらに重要な資料として使えると思います。その中にはこのような黒楽の茶碗がすでに伴っております。そのほか、美濃の製品、備前の甕・播鉢・徳利、丹波の大鉢・播鉢があります。またこれは中国陶磁の白磁皿であります。このような遺物が天正8年までの石山本願寺時代の中に同居しているということです。まあ楽茶碗の発生という問題について、天正の初めにはすでに遺跡の中に出てくるんだという1つの事例ということになります。

(71-2) それから今先ほど見ました遺物層の上に2メートルほどの整地層がありまして、その整地層上の土壌から秀吉時代の大坂城の遺物だろうと思われるものが出土しております。これは美濃窯の志野・黄瀬戸であり、天目茶碗であります。こちらは唐津の一群で、絵唐津類の茶碗・向付類と普通の無文皿、水指の蓋だろうと思われるものであります。志野は大窯製品だろうと思



71-2



70-1

ありますが、連房式登窯が登場するかどうかの非常に微妙なところで、慶長年間の早い時期のものだろうと思います。このように大窯製品の志野と絵唐津の製品は消費遺跡の中で同居するということがやはりここでも証明されるということがあります。

(70-1) それからこれは奈良県の奈良奉行所跡、今は奈良女子大学の校地になっておりますが、かつて江戸時代に奉行所があったところの堀の中から出てきたものであります。

瀬戸・美濃窯の製品は大形の段付天目茶碗と白天目茶碗、鉄釉の丸形の茶碗があります。この段付天目や茶碗には灰釉の流し掛けが施してあり、窯跡の編年でまいりますとだいたい17世紀前半期に考えられる資料であります。このような資料は江戸時代の徳川期になって新たに登場してくる遺跡の中で出土することが知られています。しかし、徳川期の遺跡においても古い大窯製品と思われる遺物がわずかに含まれます。出土遺物のほとんどは連房式登窯のもの、しかも織部焼と呼ばれる製品を含まない一群が出てきます。このことはずっと前に出てまいりましたが、静岡県新居町の御殿跡遺跡でも見ましたようにほとんど織部焼の製品を含まない遺物群に変っていることです。こうした現象は1つの徳川期になってから出てくる遺跡における遺物の様相だろうと思います。



70-2

(70-2) そこから出てくる唐津焼というのは絵唐津というのではなく、無文の碗や皿となります。その皿は内面の重ね焼の目跡が砂を用いた砂目となっております。それ以前では胎土目と言いまして、胎土と同じ土を用いて目にしております。その砂目が変わる時期として、砂目が朝鮮・李期の工人の技術ということで文禄・慶長の役後に日本に来た工人によって技法が導入されたのではないかという研究結果があり、17世紀の初めだろうと考えられております。それらは縁溝皿と言われている皿です。

3. 瀬戸・美濃窯製品の編年

次に近世城館跡の瀬戸・美濃窯を中心とした出土品の年代について、古窯跡出土資料による編年に基ついて少し述べてみたいと思います。これまで個々の遺跡のところでも述べてはきましたが、瀬戸・美濃窯は15世紀末から17世紀初めの約100年間にわたり、この地方で大窯と呼ぶ半地上式の窯体構造による生産が行われます。そして現在、古窯跡の出土資料を基礎として大窯Ⅰ～Ⅴ期の五段階の編年を試みております。この特別展の展示品の中でも目に付きます桃山陶の代表的な志野が登場しますのは大窯Ⅴ期になってからであります。大窯Ⅴ期＝志野の登場は遺跡における滅亡年次や文献等から推定して天正13年(1585)前後と考えております。また天正元年(1573)に滅亡しました滋賀県・小谷城跡と福井県・一乗谷朝倉氏遺跡からは大窯Ⅰ期からⅡ期までの製品が出土しており、大窯Ⅱ期の終りが永禄年間にありそうだということです。どうも大窯Ⅱ期とⅢ期の境いの実年代が永禄年間(1558～1569)の中にひっかかったようなかたちで、出てこやしないかと。そういたしますと、Ⅲ期と次のⅣ期というのが20年間余りということになります。

窯跡で申している大窯Ⅲ期の年代資料というのは、この時期だけ単独に遺構的に出てくるという遺跡は皆無であります。これは城館跡の出土資料の中ではどうも証明できません。すでに志野製品などといっしょに出てきます。それはもうその時代が統一の気運になって、焼亡・滅亡する遺跡群がなくなってきているという遺跡の制約上からも言うことができます。したがって、Ⅲ期とⅣ期間の線引きが非常にむずかしいと言えます。大窯Ⅳ期は茶陶生産のはしりの段階で、志野が登場する前の灰志野釉、黄瀬戸が完成する前の状況の黄瀬戸が焼かれる時期であります。もちろん瀬戸黒の生産が始まります。このようなⅠ時期を大窯Ⅳ期と捉えておりますが、これもⅢ期同様に遺跡の中で単独の包含層としてつかまえられるというのを知りません。そうしますと、非常にⅢ期・Ⅳ期というのは遺跡の中ではちょっと証明しにくい編年の時代ということになります。これはこの時代の遺跡の特殊性にも係わりあっているのだらうと思います。そういうことから、今申しましたように大窯Ⅲ期の発生を永禄年間から遅くとも天正の初め位までの期間内に考えることができます。それを証明する事例としましては、大坂城三の丸跡の天正8年に亡びます石山本願寺系の遺物の中に大窯Ⅲ期の製品が含まれるということです。さらにそのほかの傍証例をきちんと示しておりませんが、どうも天正の初めの時代に、天正10年に至らん時代に大窯Ⅲ期の時代というのが存在しそうだということです。そしてその期間はそれ以前のⅠ期・Ⅱ期の年代観よりも短かそうだと。それから、志野が登場してくるのは天正18年前後と申しましたが、大窯Ⅳ期はそれまでの数年間、10年に満たない期間が考えられます。その時代は大窯Ⅳ期の黄瀬戸・志野のはしりの灰志野の時期という非常に短い技術革新の時代を経て、大窯Ⅴ期の志野の茶陶生産へと展開したというふうに考えざるを得ないという状況であります。それから窖窯から大窯へ転換する時期をいつにするかという問題はすでに申しましたように、堀越御所跡の資料があります。この遺跡の滅亡の延徳3年(1491)の段階には、大窯最初期の遺物が遺跡の中に登場しているという事実があるのみで、それ以外に年代的に論議する資料は今のところありません。また、焼津市・道場田遺跡の土壌から出てきた享禄4年銘木札と出土した灰釉皿は窖窯器種と思われる口縁だけに灰釉をかけた小皿であります。大窯Ⅰ期のものだらうと思います。これはほかの遺物と異なり非常に摩耗痕が著しいもので、伝世期間がどうも長そうだと考えられます。木札の年代が享禄4年(1531)ということですが、書かれてすぐ廃棄されたか、伝世期間があつて廃棄されたかという問題を含みますが、灰釉皿の遺存状態から考えまして大窯Ⅰ期が年代的に1531年まで下がるというような資料として扱わなくともいいのではないかと考えております。

以上、施釉陶の世界はそのような編年観を捉えてみました。

4. 瀬戸・美濃窯以外の近世諸窯製品の分布

一方、施釉陶に伴う焼締陶はこの一覧表の点で示す通りであります。これは特別展に借用してきました資料に限っておりますので、各遺跡の報告されている全資料を網羅した上で標示しておりませんということをご了承願いたいと思います。ですから出土しているのに点が打っていないというのがかなりあるかと思います。その資料を元にして作りましたのが次頁からの地図(省略)であります。常滑・備前・丹波・越前・信楽など諸窯製品についてそれぞれ前の表を地図の上に落して一覧するとこんな感じになりますということを示したものです。それを見ますと諸窯間の出土分布圏に違いを認めることができます。常滑窯製品は三重県・伊勢国から東の地域に分布圏を持っており、しかも日本海側ではなくて、太平洋側に近いということでもあります。備前窯製品は瀬戸

(付 表)

展示城館跡出土資料産地別一覧

No	名 称	都府県	穴IV	大 I	大 II	大III	大IV	大V	登I	登II	登III	登IV	常滑	越前	信楽	丹波	備前	美	唐津	志戸	初山	尾林	不明	備 考
1	大光寺裏遺跡	埼玉	●																					
2	花崎城跡	"	●	●	●	●	●	●	●	●									●					
3	私市城跡	"	●	●	●	●	●	●	●	●													●	
4	赤山城(陣屋)跡	"							●	●	●	●							●					
5	葛西城跡	東京	●	●	●	●	●	●	●	●	●												●	
6	多摩ニュータウン No.457遺跡	"		●	●				●	●	●													
7	八王子城跡	"	●	●	●	●	●	●	●	●	●													
8	小田原城跡	神奈川	●	●	●	●	●	●	●	●	●											●		
9	勝沼氏館跡	山梨	●	●	●				●	●														
10	新巻本村遺跡	"		●																				
11	武田氏館跡	"		●	●	●																		
12	金生B区遺跡	"	●		●	●				●														
13	小和田遺跡	"			●	●				●	●	●												
14	塩田城跡	長野	●	●	●	●																		
15	松本城二の丸御殿跡	"			●	●	●	●																
16	唐沢城跡	"	●							●														
17	恒川遺跡	"		●	●	●	●																●	
18	北本城遺跡	"	●	●	●	●	●	●		●	●													
19	松尾南の原遺跡	"			●	●	●																	
20	堀越御所跡	静岡	●	●																				
21	長久保城跡	"		●	●	●	●			●	●											●	●	
22	駿府城跡内遺跡	"	●	●	●	●																		
23	小川城跡	"	●	●	●	●	●																	
24	居倉遺跡	"							●		●												●	
25	見付端城跡	"	●	●																				
26	笹岡城跡	"	●	●																			●	
27	鳥羽山城跡	"				●	●				●												●	
28	「御殿」遺跡	"							●	●	●	●	●	●						●	●			京伊万里
29	岡崎城二の丸跡	愛知			●	●	●	●	●	●	●													
30	寺部城跡	"	●	●						●	●													
31	伊保東古城跡	"			●	●	●																	
32	沓掛城跡	"	●		●	●	●																	
33	井田城跡	"		●	●	●	●			●	●	●												
34	堅三蔵通遺跡	"					●		●	●	●	●											●	
35	名古屋城二の丸跡	"			●						●													
36	巾下遺跡	"							●	●	●													
37	清洲城下町遺跡	"			●	●	●	●		●	●	●										●		
38	下津城跡	"	●	●	●	●	●			●	●													
39	小牧城池田屋敷跡	"			●	●	●																	
40	岐阜城(稲葉山城)跡	岐阜			●				●	●														
41	大垣城跡	"	●	●						●	●													
42-1	大森城跡	"		●		●																		
42-2	長山城(伝・明智城)跡	"																						
43	金山城(烏峰城)跡	"			●	●	●	●	●															
44	鶴ヶ城跡	"			●	●	●	●	●															
45	江馬下館跡	"	●		●	●				●														
46	山田城跡	三重	●	●	●	●	●																	
47	丹生川上城跡	"				●	●																	
48	関氏正法寺山荘跡	"	●		●	●	●																	
49	山添遺跡	"	●	●	●		●																	
50	松ヶ島城跡	"		●	●	●	●																	
51	神ノ木館跡	"							●	●	●	●												
52	下郡遺跡	"			●	●	●	●		●	●													
53	福地城跡	"			●		●																	
54	七尾城跡	石川	●																					
55	鳥越城跡	"		●	●	●	●																	
56	一乗谷朝倉氏遺跡	福井	●	●	●	●	●																	南蛮
57	菟生田遺跡	"				●	●	●	●	●	●													
58	豊原寺跡	"				●	●																	
59	小谷城跡	滋賀	●	●	●	●	●																	
60	彦根城跡	"								●														
61	安土城跡	"		●	●	●	●																	
62	観音寺城跡	"	●	●	●	●	●																	
63	小川城跡	"			●	●																		
64	坂本城跡	"	●		●	●	●	●																
65	延暦寺東塔法華總持院付近遺跡	"				●	●																	
66	洛内諸遺跡	京都	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●												
67	伏見城跡	"							●	●														
68	都谷館跡	"				●																		
69	園部城跡	"									●													
70	奈良奉行所跡	奈良				●			●	●	●													京
71	大坂城三の丸跡	大阪				●	●	●	●	●	●													
72	堺真瀬都市遺跡	"			●	●	●	●	●	●														
73	根来寺坊院跡	和歌山	●	●	●	●			●															
74	伊丹(有岡城)跡	兵庫	●	●		●																		
75	篠山城跡	"							●	●	●													
76	御着城跡	"	●		●	●																		
77	姫路城跡	"				●	●	●	●	●														
78	天神山城跡	岡山				●																		
79	保木城跡	"				●																		
80	二日市遺跡銭座跡	"							●	●	●													伊万里
81	富山城跡	"		●	●	●																		
82	大塚土居前遺跡	広島					●	●	●															
83	大内氏館跡	山口	●	●																				
84	富田川河床遺跡	島根	●	●	●	●	●	●	●															
85	富田三田良遺跡	"			●																			
86	<参考>初山窯跡資料	静岡				●																		

内はもちろんのこと、京都・北陸まで、さらには関東にまで入っております。備前窯製品は常滑窯の分布圏の中に入り込むように重なっております。それらの製品は甕でありますとか、播鉢というものです。これは品質の上で競合に勝っているのか、そこらへん、色んな問題が含まれているかと思えます。丹波窯製品は以外と遺跡の中で出土してくる範囲が狭く、京都・兵庫県下しか今のところ今回借用しました資料の中にはありません。越前窯製品は中世の鎌倉・室町時代のものを含めると、一応日本海側から、北海道南部の地区には出ていますが、特に戦国期という15世紀から16・17世紀初頭という時期で考えますと、分布範囲は小さくなりまして北陸を中心として滋賀県までとなります。山陰地方には出土しませんので、代わりに備前窯製品が出土しますので、山陰・山陽地方は備前窯の分布圏であると言えるかと思えます。信楽窯製品は地元の滋賀県を中心に、北陸から関東地方にまで分布いたします。これもやはり東方へ向いているようです。それから唐津窯の製品については、特に年代観では志野製品が出てこないと唐津窯製品が出てこないというのがほぼ遺跡の中で言えるかと思えますが、この展覧会ではこの時代のものばかりを選定しておりませんので表の中で分布圏については何も言えないと思えます。唐津窯製品は16世紀から17世紀初めの時代の遺跡ならば全国的に出てくるんだろうと思えます。楽窯製品は抹茶茶碗がそのほとんどですが、各地から出土しております。現在知られておりますのは北海道の上ノ国町・勝山館跡、京都市内の竹三条殿跡と同志社大学構内、それから平安博物館が調査しました四条烏丸通のところ、大坂城三の丸跡、堺環濠都市遺跡があります。

志戸呂窯製品は窯跡出土品を展示しておりませんので確証がつきにくいといえます。今までの窯跡についての報告例からも志野とかが登場してくる前の時代の窯が存在しそうであり、また地元で大永の年代の伝承もありまして、窯跡の存在を予測しております。

初山窯の製品というのは浜名湖の北の細江町の大窯のもので、地元の新居町・御殿跡遺跡や、長久保城跡、小田原城跡などから出土しております。

尾林窯は長野県飯田市にあり、この窯の製品が市内の恒川遺跡から出ております。製品の分布は地元を中心として小さい範囲だけに供給しているようです。

以上が瀬戸・美濃窯以外の分布圏についてであります。

5. 施釉陶と無釉陶の役割と飲食品生産

こうして見てまいりますと、瀬戸・美濃窯と唐津窯の製品は時代によって出てくる器種が異なりますが、施釉陶生産という二元窯業地をもちまして全国各地のこの時代の遺跡に供給されていたということです。それと同時に無釉陶の世界は貯蔵用でありますとか、調理具の播鉢類があります。無釉陶器は施釉陶器の代替をしておりますので、生活用器としてそれなりの使用の場を持っており、しかもそれぞれが各窯場の商圏というか、分布範囲をある程度持っているということでもあります。それからもう1つは、なぜこの時代になりますと瀬戸・美濃窯の碗・皿類などを中心にして食器製品の生産が爆発的に興るかということでもあります。おそらくこの時代になって、食生活の中で施釉陶製品を多量に使うという習慣ができたのではないだろうと思えます。

前代の中世窯業と申しますと焼締陶製品の壺・甕・播鉢という三器種の生産で説明されております。これは植崎先生が丹念に調べまして、その状況が判ってきているわけではありますが、その中で瀬戸窯の施釉陶生産のものは、無釉陶の壺・甕・播鉢とは器種的に役割分担が違っておりまして、瀬戸窯の施釉陶製品だけ別に見直さないといけないと思えます。瀬戸窯製品がどの程度に

食生活に関与していたかということです。この食生活に使用したとする製品というのは、いわゆる山茶碗であったのか、土師器であったのか。関西方面では瓦器の椀・皿はたくさん出てまいります。こういった製品の研究というのは東海地方では遅れているんじゃないかと思います。山茶碗というのは窯跡はたくさんあり、大量に焼かれております。これがあちこちの遺跡から出ることによって見向きもしないというような弊害が出てきておりますが、こういうたくさん中国陶磁を含む碗・皿類をともかく使うという習慣はおそらく以前からあって、この戦国期になって中国陶磁を手本として中国陶磁の分野を食うようにして大窯生産が始ったのではないかと思います。ですからこの特別展の出土品を見ますとあまりにも碗・皿が多いですが、この瀬戸・美濃窯生産の器種を代替するものが鎌倉・室町時代におそらくあって、たまたまその研究が遅れているために急にこのような製品が登場したような感じを受けるのではないかというような印象を持ちました。

だいたい今申しましたように特別展「近世城館跡出土の陶磁」の調査・展示を通しまして、全国各地の資料を集積した上で、窯跡の編年観とを照らし合わせて考えました結果の1つであります。

(昭和59年11月4日 昭和59年度特別展「近世城館跡出土の陶磁」の講演録より)